

# CHISE

(CHISE：北川愛夏、原田雅子、日高康、田中美穂、岸田夕奈、竹川美穂、森菜々子、乾美紀)

## 1. CHISE の設立の歴史

学生国際協力団体 CHISE（チーズ）は、ラオスの子どもたちの教育環境を改善することを目的として、2009 年に神戸市立外国語大学の学生によって設立された。その中には多くの県大生が含まれており、環境人間学部の乾先生が顧問を務めている。

CHISE は、Children, Hope, Immortal, Smile, Education の頭文字を取って作られた言葉で、「チーズ」と読み、『「はいチーズ」の一言で世界に広がれピースの輪！』をコンセプトに、活動を展開している。

具体的な活動地は、ラオスの山岳地帯に位置するルアンパバーン県の郊外にある農村地域である。これまでに、CHISE は 2011 年 1 月、ホエイカン村に学生国際協力団体「夢追人」と協力して 1 校目の校舎を建設した。その後は CHISE と村人で費用を半分ずつ出し合い、2014 年 3 月にホエイペン村に 2 校舎目を、2017 年 2 月にコックハン村に 3 つ目の校舎を建設し、2019 年 2 月にはホエイカン村に幼稚園を建設した。そして、2020 年 9 月には新たにプークー村で 2 つの校舎とトイレを完成させた。プークー村は地域の中でも貧困度が特に高いため、CHISE が校舎の建設費を全額負担するべく、初めてクラウドファンディングに挑戦した。SNS やクラウドファンディングサイトでの発信に力を入れた結果、131 人の方々に支援をしていただき、目標金額の 100 万円を 2 か月間で達成することができた。クラウドファンディングに加え、環境人間学部で行われたキャンパスシンポジウムや街頭募金などでいただいた寄付を現地へ送金し、校舎を完成させることができた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。



図 1：クラウドファンディングサイト  
(2019 年 12 月～2020 年 1 月)



図 2：完成したプークー村の小学校  
(2020 年 9 月)

CHISE には現在、環境人間学部の学生をはじめ、理学部、国際商経学部の学生が多数在籍しているが、武庫川女子大学や関西学院大学など、様々な大学の学生とともに活動を実施している(2021 年 2 月現在、メンバーは 18 名)。

## 2. 具体的な活動の内容

現在、CHISE は毎週日曜日の午前中にオンライン上でのミーティングを行っている。ミーティングでは、主にラオスの村で行う教育支援について話し合っている。ラオスへの現地訪問の際に実施する授業の内容や、村人や学校の教師に対して行うインタビューの内容などについても話し合いを行っている。

例年は、年に 2 回ラオスへのスタディーツアーを実施しているが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の状況を受け、現地での活動を見合わせた。しかし、2021 年 2 月には、オンライン上で授業やインタビューを行うオンラインスタディーツアーを企画・実施することができた。ここで行ったインタビューの結果をもとに、村人や学校が必要としていることをまとめ、今後の支援に繋げていく予定である。

日本での活動としては、街頭での募金活動や学園祭への参加、中学校や高校での講演活動を行っている。街頭募金などで受けた寄付金や、学園祭で得られた利益は、すべてラオスの教育局を通じ、支援している村に送金している。

また、多文化共生への理解を深めるため、外国にルーツのある子どもたちが通う城東町の補習教室でのイベントへの参加も行っている。CHISE と姫路市の関わりは深く、4 年前から SEN 姫路ボランティアクラブより支援を受けており、ゴールデン Z クラブの会員として、地域との交流も深めている。

講演活動は、CHISE に興味を持ってもらうことと、CHISE の活動についてより詳しく知ってもらうことを目的としている。今まで講演活動を行ってきた学校は、姫路市花田中学校や兵庫県立鈴蘭台高校などである。神戸市立青陽東養護学校は、生徒会の活動や、作業療法の授業の一環として作成した手作りのノートや、生徒から集めた文房具を寄付してくれており、それをラオスの子どもたちに届けるのも CHISE の役割である。このように、ラオスの子どもたちと日本の子どもたちを結ぶ活動も積極的に行っている。

### 3. 現地のラオスの子どもたちとの交流内容

ラオスでは、様々な道具を使った遊びや衛生の授業を行っている。授業は、ラオスの子どもたちが普段の授業では学ばないことを身に着けられ、想像力や発想力の活性化につなげられることを目的としている。直近では鏡を用いた光の実験や、運動会を実施しており、日本では理科や体育、図工などに相当するものを中心に幅広い題材を扱っている。

2020 年度のスタディツアーはオンライン開催となったため、授業に必要な道具や時間を考慮し、ラオスの子どもたちには手洗い・歯磨きの衛生の授業のみを行った。これらの衛生の授業は、2015 年から毎回のスタディツアーで実施しており、子どもたちに習慣化されることを目指している。歯磨き・手洗いの指導では、健康な生活を送る上での歯磨きの大切さや、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から手洗いの重要性が上がったことを伝えたり、正しい歯磨き・手洗いの方法を実践で教えたりしている。実践では、子どもたちのスムーズで慣れた様子を見ることができ、徐々に歯磨きや手洗いが習慣化されてきていることが分かった。この正しい衛生習慣を守っていけるように、今後も継続的なサポートを努めたい。



図 3 : 歯磨きの授業の様子  
(2021 年 2 月)

また、オンライン上での交流は初めてであったが、子どもたちがパソコンの画面上に映る私たちに一生懸命手を振り、元気な姿を見せてくれたことはとても印象的であった。中には、以前ラオスで交流したメンバーのことを覚えており、再会することを切実に願い、手紙を書いてくれた子もいた。今後も、メンバーと子どもたちとのつながりを大事にした活動を行っていききたい。



図 4 : メンバーとの再会を喜ぶ子どもたち  
(2021 年 2 月)

### 4. 今後の活動に向けての課題

2020 年度は、現地でのスタディツアーをはじめ、街頭募金や学園祭への参加、講演会などの様々な活動が中止となり、CHISE としての活動を休止していた時期もあった。今後もそれらの活動を実施できない状況が続いていくことが予想されるため、新たな活動の形を考えていく必要がある。

その新たな取り組みのひとつであるオンラインスタディツアーは無事に成功させることができた。しかし、今回のオンラインスタディツアーでは毎年行っていた実験などの授業を実施できなかったことや、私たちがパソコンを活用した授業の形に不慣れであったことなど、多くの課題が残されている。次回のオンラインスタディツアー実施に向けて、現地に道具がなくても実施でき、子どもたちが楽しみながら学ぶことができるような授業の方法を考えていかなければならない。

また、今回のオンラインスタディツアーでは、新たに支援を検討している中学校を見学することができた。今後は、この中学校の情報を収集していくとともに、インターネットを活用した現地に訪問しない支援の形の確立や、支援先の 3 つの村の子どもたちによりよい教育を提供できる環境を整えることを目指して活動していきたい。さらに、現地での支援が可能となった際に、どのような支援を行っていくのかについても、ミーティングを重ねていく予定である。